

朝顔姫君の構想に関する試論

——葵巻を中心として——

田 坂 憲 二

源氏物語第一部前半において、葵巻は一つの大きな構想の転換点とされる。花宴巻と葵巻との間には、桐壺院退位とそれに伴う一年間の空白期間が設定され、その前後を、源氏の十代の物語と二十代の物語^(注1)、中將の物語と大將の物語^(注2)のように捉えることが可能である。又、葵巻以降は、継続的な歲月の流れが明確になり、確固たる長編構造を有してくるとの指摘もある^(注3)。

このような葵巻の特殊な位置は、源氏と源氏を取りまく女君たちとの関係の結び直しという面からも容易に看取できるのであり、正妻葵上の死、紫上との新枕等が描かれる。一方、「六条わたり」の貴女が、前春宮妃六条御息所として明確に定位され、紀伊守家の侍女の口を通じて間接的に紹介されていた朝顔姫君も、この葵巻において実質的に姿を現わす。

この朝顔姫君は、葵巻においてつねに六条御息所と対比的に描かれているのであるが、その対照表現の内実・意義、更にはその構想の淵源について考察を加えてみようとするのが本稿の目的である。

一

葵巻の巻頭近く、次のような記述が見出される。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君齋宮に
ゐたまひにしかば、大將の御心ばへもいと頼もしげな
きを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて、
下りやしなましと、かねてより思しけり。(中略)女
も、似げなき御年のほどを恥づかしう思して心とけた
まはぬ気色なれば、それにつつまたるさまにもてなし
て、院にきこしめし入れ、世の中の人知らぬくな

りにたるを、深うしもあらぬ御心のほどをいみじう思し嘆きけり。かかることを聞きたまふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じ、と深う思せば、はかなきさまなりし御返りなどもさをさなし。(II 一二二)^(注4)

帚木三帖において点景的に描かれていた二人の女君が、六条御息所、朝顔姫君という呼称を与えられ、それが読者にとって既知の事柄であるかのような描き方になっているため、欠巻「かくやく日の宮」の巻の存在を推測するなど、^(注5)古来より論の尽きない箇所であるのだが、その表現形式にもまして重要なのは、語られている内容そのものである。

つまり、朝顔姫君が、六条御息所と源氏との関係に、極めて敏感に反応していることの持つ意味である。正妻葵上に比肩しうる人物として、世間も認めるであろう二人の女君のうち、朝顔姫君が、今一人の六条御息所に関する情報を的確に把握しているような構造を、物語があえて提示しているのは、注目してよい。源氏と六条御息所との愛情生活が不幸であればあるほど、朝顔姫君が自らの身を冷静に処するという構図が、既にこの葵巻々頭近くの一文で確立されていると見てよいのではないか。

そもそも夕顔巻において、六条御息所が初めて物語内に登場した段階から、「とけがたかりし御気色を、おもむけきこえたまひて後、ひき返しのめならんはいとほしかし」(I 一二二)と記され、源氏の心が離れていくのを嘆く女性

として設定されていたことを考え併せると、この六条御息所と朝顔姫君の相関々係は、物語の始源的構想の一つではなかったか、とも考えられるのである。速断は避け、今少し葵巻の記述を追ってみることにしよう。

物語はやがて、桐壺院の女三宮の新斎院としての御禊の場面へと移る。ここで、葵巻中の庄巻とも言うべき、葵上と六条御息所との車争いが描かれるのであるが、同日の御禊には、朝顔姫君も見物に赴いている。六条御息所・朝顔姫君が、共に新斎院御禊の日に物見に出るということ自体、物語の構成上、両者は対応させて描かれていると言えそうであるが、源氏の姿に目をやるこの二人の女君の心中を比較してみる時、このことの持つ意味の重要性は一段と明確になる。

六条御息所は、葵上との車争いに敗れ、御禊の見物をやめて帰ろうとするのだが……、

ものも見で帰らんとしたまへど、通り出でん隙もなきに、「事なりぬ」と言へば、さすがにつらき人の御前渡りの待たるも心弱しや。(中略)涙のこぼるるを人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御さま、容貌のいとどしう、出でばえを見ざらましかば、と思さる。(II 一七)

源氏の正妻葵上の一行に、人前でさんざん辱しめられながらも、又、昨今の源氏のつれない仕打ちを恨めしく思っ

いながらも、御禊の行列中の源氏の様子に、改めて心ひかれる六条御息所の心情は、源氏に魅せられてしまった女の業とでも形容すべきであろうか。「さすがにつらき人の御前渡りの待たるも心弱しや」という表現は、源氏の魅力の呪縛にあらがいきれずにひかれていく六条御息所の心を、絶妙な筆致で描き切ったものと言えよう。

ところで、この「前渡り」という語が、平安朝の文学作品において如何なる内実を有しているのか、ということが今井源衛先生によって論じられており、^(注6)この用例も、その論考に取り上げられている。先生は、この場面を「当事者の心情としては室息寸前にもひとしい程に抑制を強いられている」とされるが、正に当を得た解説である。平素の源氏のつれなさへの恨みが精神の基底にあり、又、当日は、葵上の一行に陵辱されるといふ異常な状況下において、なお憑かれたかのように源氏を見つめる六条御息所の姿には、鬼気迫るものがあると言ってもよいほどである。

一方、朝顔姫君も父式部卿宮と共に御禊の行列を見に來ており、源氏の美々しき姿に目をとどめる。

式部卿宮、棧敷にてぞ見たまひける。「いとまばゆきま
でねびゆく人の容貌かな。神などは目もこそとめたま
へ」とゆゆしく思したり。姫君は、年ごろ聞こえわたり
たまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにて
だにあり、ましてかうしもいかで、と御心とまりけり。

いとど近くて見えむまでは思し寄らず。(Ⅱ二〇)

不吉なまでに美しい源氏の姿を見るにつけて、改めて強く心を動かされる朝顔姫君ではあるが、にも拘らず「いとど近くて見えむまでは思し寄らず」と記される。この朝顔姫君の心強さは、直接的には、この引用部分の直前に記されている「ここかしこにうち忍びて通ひたまふ所どころは、人知れずのみ数ならぬ嘆きまさるも多かり」の記述と対応するものであるが、より本質的には、前掲の六条御息所の心情と対応する構成になっている、と見るべきではないだろうか。六条御息所と朝顔姫君に関する描写の間には、「えせ受領のむすめ」や「うち忍びて通ひたまふ」女たちの話が、挿話的に描かれてはいるものの、御禊の行列における源氏の美しさをまのあたりにした二人の女君の心情は、際立った対照をなしており、相互補完して鮮烈な印象を与えるものである。即ち、六条御息所の描写を通過させることによって、後年まで源氏の求愛を避け続けた朝顔姫君の精神の土壌を形成させたような形となっているのではないだろうか。

葵巻の半ば、夕霧の出産と共に、葵上は世を去る。妻を失い、独り寝をかこつ源氏の許に、六条御息所から「菊のけしきばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて」消息があるが、今めかしいそのやり方も、葵上の死の原因が六条御息所の生霊に憑かれたことにもあると知っている源氏には、

ひたすらうとましく思われるのみである。そのような或る日、源氏は所在なきに、朝顔姫君と消息を交し、変らぬ奥ゆかしさを持つこの女君に心ひかれるのである。

つらき人しもこそと、あはれにおぼえたまう人の御心ざまなる。つれなながら、さるべきをりのあはれを過ぐしたまはぬ、これこそかたみに情も見はつべきわざなれ、なほゆゑづきよし過ぎて、人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出で来けり。(Ⅱ五一)

葵上の死後、源氏と二人の女君とのやりとりが描かれ、六条御息所の文にはうとましさを感じ、朝顔姫君の返歌には心ひかれるという構成自体が、ここでも二人の女君を対応化させることになっているのだが、「なほゆゑづきよし過ぎて」云々の記述には注目してよいだろう。早く『細流抄』がこの箇所「御息所などの類也、世界の交を云也、まはり(註7)のあまりにこき人はあく心のある也」と、注しているように、源氏の心中において、六条御息所と朝顔姫君が比較対照されているのである。そしてそれは、作者の創作意識の反映でもあると言ってよいのではなからうか。

以上、葵巻の記述から、六条御息所と朝顔姫君との関係を見てきたのであるが、既述した如く、六条御息所と源氏との愛情生活の破綻が、朝顔姫君を源氏から遠ざけ、一方そのため源氏は一層朝顔姫君にひかれるものを感じるという、一種の堂々巡りのような構図を見出すことができよう。

二

賢木巻で、六条御息所は齋宮となつた娘と共に伊勢に下り、朝顔姫君は賀茂齋院となつて源氏の前から去る。このようなことも相俟つて、古来よりこの両者は、何らかの形で対照的に考えられることが多い。早くそのことを的確に指摘したのは萩原広道である。広道は『源氏物語評釈』の総論の中で、次のように述べている。

朝貌の姫君は、帯木巻に、空蟬の方にて女房どもの源氏君の事を評ずる語のうちに、にははせておきて、さて次々に顕はしかゝれたる、これも(六条御息所と、筆者注)同じ法なるに、一人は御むすめの齋宮にそひて伊勢へ下り給ひ、一人はみづから賀茂の齋院に立給へるなど、伊勢と賀茂とを相對へたるにて、件の伏線を引動かしたる書ざまとしられたり。(註8)

又、池田亀鑑博士は「源氏物語の構成とその技法」(註9)の中で、朝顔齋院は「構想的には多くの場合、空蟬および六条御息所との対照において意識されている」と述べられた。同様の簡単な指摘は多々あるが、この問題を最も詳しく扱っているのが、森藤侃子氏の「謹齋院の初期をめぐって」(註10)である。同論は、本稿との関りが大きいので、以下少しく委しくみてみたい。

森藤氏の同論文は、戦後の源氏物語研究における一つの

重要な成果である朝顔巻論^(注11)を呼び起こす契機となった「権斎院をめぐって」という卓越した論考の、謂わば続稿のような形で書かれたものであり、朝顔巻以前における朝顔姫君について考察されたものである。氏はまず、葵巻冒頭の朝顔姫君に関する記述が「六条御息所につづいて、あたかもそれが極めて自然な連想でもあるかのように」出てきていることに注目される。

この部分についていえば、御息所のひきあいに出されたというか、対照的な人物として、なだらかに賢明に身を持つとする人柄が押し出されている。そういういみでの存在理由は、このばあい消極的ながらあるわけである。

また、葵上死後の、源氏と朝顔姫君との贈答の場面においても「ゆゑよしすぎて」云々という記述は「御息所への批判が意識されているのであらう」とされ、更に次のように述べられる。

(葵巻においては朝顔姫君が、筆者注)御禊の見物の記事以外の二カ所が御息所に関連して記されていることは、この人物の創出の上でも注意していいだろう。

ただ、前節で検討してみた如く、御禊の見物の場面も、明らかに六条御息所と朝顔姫君は一つの対応関係において描かれており、他の二場面とも相俟って、際立った効果をあげているというべきであらう。いづれにせよ、細かな補足

は必要であるにしても、森藤氏の、葵巻における六条御息所と朝顔姫君との関係の捉え方は正鵠を射たものであり、前節における私の考察も、氏の論に導かれつつ、更に委しく再検討を試みたものである。

ところで森藤氏は、六条御息所との関係に注目されながらも、朝顔姫君に関する記述は、

すべてこの葵巻において挿話的な事柄であり、これらの記事がなくてもこの巻の総体的な事柄には、何の影響もないといえよう。

と、述べられるのである。氏の言には、何ら修正の必要はないのであるが、私はこの「挿話性」ということに、今少し拘泥してみたいのである。朝顔姫君の話が挿話的なものであるならば、それを数度に亘って叙述した作者の意図を問うてみたいのである。物語の展開の主流からはずれたものであればあるほど、それを挿入した作者の創作意識というものは確固たるものがあるはずであり、それを探究する必要があるだろう。

とすれば、葵巻において六条御息所と朝顔姫君が常に対応して描かれているということは、より本質的な意味を持つているのではないかと思われる。朝顔姫君の姿が直接的に描かれるのは、葵巻冒頭近くの記述が最初であるのだが、この段階で、六条御息所と源氏との愛の不耐を知らされることによって、源氏を拒む女君としての造型が既に完了し

ていると見るべきなのである。朝顔姫君が源氏の愛を拒み通すには、抽象的な愛への不快感や心強さだけでは不十分なのであり、六条御息所の愛の生活の不幸な結末を見せられることによって、初めて、源氏を拒む女君としての立体感を付与されるのである。空蟬の場合は、受領の妻として身の定まっていることが、源氏の愛を受入れ得ぬ最大の理由であったが、式部卿宮の娘である朝顔姫君は、一人の高貴な女君と源氏との愛の悲惨な結末を知ることが、源氏の求愛に答えられない原因となっているのである。即ち、朝顔姫君と六条御息所は、単に物語の構成の上で、或いは人物の性格として対照的に描かれているのみならず、前者が源氏の求愛を拒む女性としての像を確立するためには、後者の存在は不可欠なものであったのである。

このように、六条御息所と朝顔姫君は、その内実において極めて密接な関係にあるということが、葵巻において言えるのである。従って、この二人を対照的に造型しようとする創作意識が、作者の脳裡に存在していたと考えることは認められよう。換言すれば、六条御息所と朝顔姫君を対照化して描くことが、作者の構想の根源的なものとして在ったと考えるべきであろう。とすれば、次に、この構想がどの程度始源的なものであるのか、どの段階まで逆上り得るのか、ということが問われなければならない。帚木三帖に目を転ずる必要があるだろう。

三

空蟬・軒端萩そして夕顔と、所謂、中の品の女性と源氏との交渉を描いたのが帚木三帖であるのだが、この三帖において、源氏と関りのある上の品の二人の女君の姿が、噂話・挿話として、点景的に描かれている。

まず、帚木巻で、紀伊守邸へ方違えに行った源氏が、同家の女房たちが、自分に関する噂話をしているのを立ち聞く場面で、

式部卿宮の姫君に、朝顔奉りたまひし歌などを、少し頬ゆがめて語るも聞こゆ。(一一七一)

と、朝顔姫君の存在が示される。一方、夕顔巻は、「六条わたりの御忍び歩きのこと」と書き起こされ、最後まで「六条わたり」と実名を明さぬ書き方ではあるが、六条御息所と源氏との関りが、夕顔との交渉の話の中に挿み込んでいる。

さて、帚木三帖の女主人公ともいべき中の品の二人の女性のうち、空蟬は、源氏の愛を拒み通すということにおいて、朝顔姫君と共通の地盤を持っており、前引の如く、池田亀鑑博士もそのことを指摘している。

この空蟬と朝顔姫君との共通性ということについて、詳しい考察を試みられたのが藤村潔氏である。氏は「朝顔の姫君と空蟬物語との関係」^(注13)において、改めてこの問題を取

り上げて、

朝顔の姫君が帚木巻に見えるのは（中略）朝顔の姫君と源氏との関係を中心とした物語、もしくはその構想が先にあって、それが空蟬の物語に創りかえられたことの結果であろう。

と述べられている。両者の関係においては、空蟬の構想より朝顔のそれが先行するという、注目すべき仮説の提出であり、傾聴する必要がある。

一方、夕顔に関しても、朝顔姫君と浅からぬ関係があるとされている。朝顔と夕顔、この呼称自体が対偶関係にあるものであるが、両者の関係をより緊密にしているのは、しばしば指摘される、次の、紫式部集所収歌である。

かたゝかへにわたりたる人の、なまおほくしき
ことありとてかへりにけるつとめて、あさかほの
花をやるとて

おほつかなそれかあらぬかあけくれのそらおほれする
あさかほの花

返し、てをみわかぬにやありけん
いつれそというわくほとにあさかほのあるかなきかに
なるそわひしき^(注14)

鬼束隆昭氏は、この紫式部の歌と、夕顔巻における夕顔と源氏の贈答の

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる
花の夕顔

という歌の間には、古今六帖第六の「おぼつかなたれとかしらん秋霧の絶間にみゆるあさがほの花」を媒介にして、極めて密接なつながりがあるとされる。^(注15) 又、氏は、夕顔巻冒頭近くで、夕顔が源氏に歌を贈ることが、後の夕顔の人間像と分裂をきたしていることについて、家集に見られるような、宣孝との実体験を物語に持ち込んだためであるとされる。共に重要な指摘であろう。

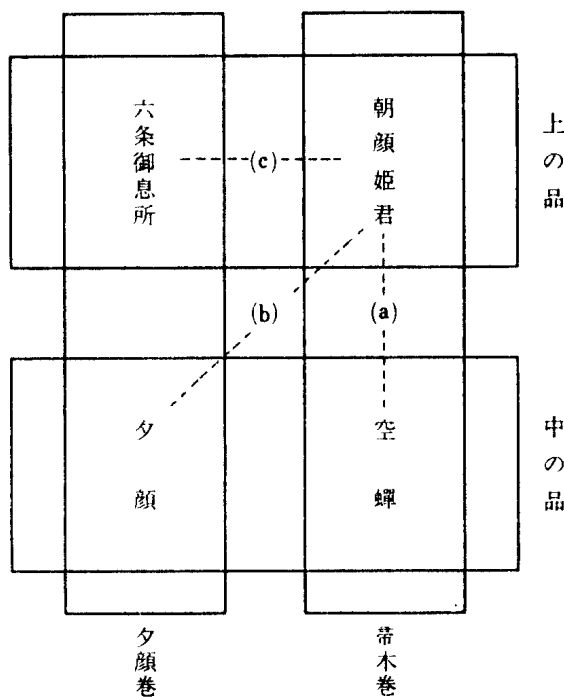
さて、六条御息所と朝顔との関係についても、しばしば問題とされるところである。夕顔巻で六条御息所邸を訪れた源氏は、翌朝「霧のいと深き頃」同邸を辞するのであるが、その際の侍女中将との贈答、御息所邸の前栽の風景に、朝顔は極めて効果的に使用されているのである。大和絵の構図をそのまま抜き出したような、正に「絵にかかまほしげな」美しいこの描写が、「式部卿宮の姫君に、朝顔奉りたまひし」という記述と、何らかの内的関係を有するのではないかと、指摘されるところである。^(注16)

以上のことを簡単に纏めてみると次のようになる。

(a) 朝顔姫君も空蟬も、源氏の愛を拒む女性として造型されている。

(b) 朝顔と夕顔の呼称は対応しており、更に式部の実体験と深い関係がある。

(c) 六条御息所邸で、朝顔が舞台効果をあげるべく巧みに使用されている。



叙上の考察に基き、帯木三帖における四人の女君の関係を図示すれば、このようになるであろう。源氏と中の品の女性との関りの中で、上の品の女君についても僅かながら語られるという、極めて立体的な構成をとっているわけである。

勿論、前図のような構図は、帯木・夕顔巻の記述を抽出することによって再構築してみたものであり、紫式部の脳裡に、このように整然と存していたものであるとは限らない。源氏と関りのある上の品の女君の話を、噂として挿話として挟み込むことによって、中の品の女性の物語である

帯木三帖の構成に厚みを持たせようとした技法ではないか、とも考えられる。また、技法とは言え、それが必ずしも意識化されたものである必要はなく、無意識裡に作者が自家薬籠中のものとしていたと考えることもできよう。玉上琢彌氏がしばしば指摘される、源氏物語は、描かれざる部分が描かれた部分の外側に広く存在し、それを支えるような構造になっている、^(注17)ということが改めて想起されよう。

四

葵巻における六条御息所と朝顔姫君の対応化の構想が、帯木三帖の時点で存在していたか否かを検討するために、前節においてはその前段階として、帯木三帖における朝顔姫君と空蟬以下の女君との関係について見てみたのである。以下は、限られた記述から多くのことを推測するために、極めて仮説的色彩の濃いものになることをお断りする。

さて、朝顔姫君と六条御息所との関係については、次の二つの可能性が考えられよう。

(一) 帯木三帖において、朝顔姫君と六条御息所を結ぶ内的存在はなく、挿話として登場していたこの二人の女君を、葵巻において、改めて対応化させて再登場をさせた。

(二) 朝顔姫君と六条御息所は、帯木三帖において既に内

的關係——上の品、挿話、としての共通性だけではなく——があり、葵巻では、それを完全な形で具現化させた。

私としては、葵巻における二人の対応關係があまりにも効果的なものであり、この關係が帚木三帖以降に改めて着想されたとは考えにくいために、後者の考えを支持したいと思う。葵巻において、挿話的な出来事である朝顔姫君がわざわざ描写されるのは、作者の意識下において、早く六条御息所と密接に結びついていたからにはかならないのではないだろうか。とすれば、何故に、朝顔姫君と六条御息所を対照化させて描出することが葵巻まで延ばされているのであろうか。

源氏と同階級に属する女君、所謂上の品の女君に關する構想が、帚木三帖執筆以前に、ある程度具體的なものとしてあったのではないだろうか。一言で言えば、それは、源氏の愛を受け入れ契りを交しながらも不幸になっていく女性（六条御息所）と、源氏の愛を知り、又、源氏にひかれながらも契ろうとはしない女性（朝顔姫君）とを描く構想、つまり愛情の種々相を描こうとする意図があったのではないかと思われる。当然のことながら、そこでは、六条御息所と朝顔姫君は対照的な存在であった、と言えるだろう。しかし、以上のような構想が完全には具体化しないうちに、雨夜の品定めを総序とする中の品の女性の物語の

確固たる構成が確立されることにより、上の品の女君の話は、一旦物語の構想から排除され、僅かに、噂話・挿話として痕跡的に姿を留めるに至ったのではあるまいか。そして、改めて上の品の二人の女君を正面から取り上げたのが葵巻であったと思われる。当初上の品の物語が構想されるにあたっては、朝顔姫君に關しては、何らかの形で式部自身の体験が素材として用いられたであろうことは、認められよう。従って、場面性としてはかなり具體的なものを伴っていたため、夕顔の物語や、挿話として残った六条御息所の話の中に取り込まれたのであろう。^(注18)前節で、朝顔姫君と空蟬以下の女君との關係を、(a)と(c)と簡単に纏め図示してみたのであるが、このうち(b)と(c)に關しては、言うなれば、場面性の轉移の關係として捉えることができるだろう。これに對して(a)の關係、即ち、朝顔姫君と空蟬の關係については、主題性の轉移と言ってよいだろう。次に、この主題性の轉移について考えてみたい。

朝顔姫君から空蟬へと、帚木三帖において源氏を拒む女君が交替したとすれば、それは如何なる理由によるものなのだろうか。上の品の物語から中の品のそれへと、一般的な形態のみに還元するのではなく、物語内における文芸論的意義をも、併せて問う必要があるのである。

私は、源氏の愛を拒む女性として、朝顔姫君に替えて空蟬を登用したことは、重要な意味があると思う。伊予介の

妻として、受領階級に身の定まった空蟬であるからこそ、源氏の愛を受け入れることの無意味さを自覚し、源氏を拒絶することの必然性が強調されるわけである。空蟬の嘆きは、いとかくうき身のほどの定まらぬ、ありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば（一七八）

というものが、その根幹をなすものであったのである。

式部卿宮の娘であり、未婚の朝顔姫君が源氏の愛を拒む女性として造型されるのならば、如何なる肉付けが可能であるのか。恐らく、抽象的な愛情不信、心強さの域を出ないのであろう。そのままの形で筆を進めることは、この段階の筆者としては極めて荷の重い仕事であり、朝顔姫君は平面的な人物とならざるをえないであろう。第一部の主要プロットの一つである明石君の悲劇も、受領の娘と設定されていることに極めて多くのものを依拠させていることも思い併されるだろう。

朝顔姫君が源氏の愛を拒むためには、愛憎の無間地獄をさまよう六条御息所の姿に接することが必要であったわけである。従って、愛憎の闇に迷う御息所の姿を執拗に追い続ける構想が日程に上って、初めて源氏の求愛を受け入れぬ女君としての再登場が可能になったのである。

五

葵巻における朝顔姫君と六条御息所とが絶妙な対応関係

をなしていることは、繰り返し述べてきたところである。両者の関係は、そのまま次の賢木巻にも受け継がれている。伊勢へ賀茂へ、斎宮の母として斎院として、源氏を離れて行くこと自体がそうなのであるが、今少し委しく見てみると、細かな点まで対応していることがわかる。

賢木巻は、源氏二十三歳の秋、野宮に六条御息所を訪ねる場面で幕をあける。「はるけき野辺を分け入りたまふよりいともあはれなり」以下の描写は、しばしば言われる如く、源氏物語全巻を通じての屈指の名場面でもある。

翌年春、桐壺院の女三宮は父院の服喪のために退下、替って朝顔姫君が斎院に卜定される。同年秋、雲林院に参籠した源氏は、「吹きかふ風も近きほどにて」紫野斎院の朝顔姫君に文を送る。この箇所は、作者のケアレス・ミスの一つとされている所でもある。紫野斎院に移るのは卜定後二年目が通例で、今春卜定したばかりの朝顔姫君が紫野にいるのは不審とされる。

私は、この間の事情を、以下のように考える。「時しもあれ秋」に、六条御息所・朝顔姫君が源氏と別れをかわす、という構想があり、作者自身がそれに引きづられたのではないかと。二十三歳の秋に六条御息所と離別した源氏が、翌年秋には朝顔姫君と最後の贈答をかわす、という構想——或いは、場面性の設定と言ってもよいが——を意識するあまり、春に斎院に卜定したばかりの朝顔姫君を、秋に

紫野に移すというミスを犯したのではないか、と思われるのである。又は、これを作為的なものとすれば、敢えて年立的時間を見捨て、源氏の内的時間に即して叙したということになる。このことは、源氏が朝顔姫君との贈答の中で、六条御息所を思ひ出すという構成になっていることから納得できるのではあるまいか。

朝顔姫君との贈答の過程で、「あはれ、このころぞかし、野宮のあはれなりしこと、と思し出」づる源氏を描いた作者には、この場面と、賢木巻頭の野宮における六条御息所との別れの名場面とを、オーヴァ・ラップさせようとする意識があつたのではないかと思われる。紫野に野宮を重ね併せることによって、一人また一人と、女君が源氏の傍を離れていくことを読者に強く印象づけることができるであろう。そのことによって、源氏の身辺の寂寥感は、より著しいものになると言えるだろう。

六

このようにして、六条御息所も朝顔姫君も源氏から去って行った。葵・賢木巻と明確な対応関係におかれた二人の女君のうち、一方が再び舞台に姿を現すとすれば、作者の意識下において深く結びついているいま一人の女君の登場も、十分に予測されるところである。愛憎の辛酸をなめきつた六条御息所が、再び源氏と縁を戻すとは思われない。

では、朝顔姫君はどうであろうか。六条御息所の業苦を垣間見たこの女君が、後日、源氏と結ばれる可能性はあるのであろうか。作者は、六条御息所と源氏との関係にふれさせることによって、朝顔姫君の意識を形成した。時の流れはこの意識を変えることができようであろうか。

六年後、帰京した六条御息所は、物語内における役割の終結を示すように、娘の前斎宮を源氏に託して世を去る。御息所へ向けられていた源氏の心は、自らの養女となったこの前斎宮へと向けられる。しかし、その源氏の情念も、頂点に達したところで春秋優劣論へと止揚されることによって終止符を打たれる^(注19)。替って、朝顔姫君が再度源氏の前に姿を現すことになるのだが、その時に、源氏と朝顔姫君との関係が、主題的な意味を担って、今一度作者によって問われることになるのである。

注

- (1) 藤村潔『源氏物語の構造 第二』(昭46)
- (2) 伊藤博「源氏物語の周辺——紅葉賀・花宴巻断想——」『文学論叢』18、昭46・3。『源氏物語の原点』所収
- (3) 大朝雄二『源氏物語正篇の研究』第十二章「葵巻における長編構造」(昭50)
- (4) 小学館『日本古典文学全集』本により、巻冊数と頁数を示す。以下同。
- (5) 高橋和夫「桐壺巻の成立をめぐる諸問題」(『日本文学史研究』6、8、昭25。『源氏物語の主題と構想』所収)

武田宗俊「『輝く日の宮の巻』に就いて」(『国語と国文学』昭26・9。『源氏物語の研究』所収)

風巻景次郎「源氏物語の成立に関する試論」(『国語国文』昭26・5、「文学」昭27・4・5など。『日本文学史の研究(下)』所収)など。

(6)『『前渡り』について——源氏物語まで——』(『中古文学』17、昭51・5。『紫林照径 源氏物語の新研究』所収)

(7)伊井春樹編『内閣文庫本 細流抄』による。

(8)国文註釈全書『源氏物語評釈』による。

(9)『望郷』8、昭24・6。『池田亀鑑選集 物語文学I』所収)

(10)『日本文学』昭40・6。

(11)秋山虔「紫上の変貌」(『国文学』昭39・5。『源氏物語の世界』所収)

今井源衛「紫上——朝顔巻における——」(有精堂『源氏物語講座』第三巻、昭46。『紫林照径 源氏物語の新研究』所収)など。

(12)たとえば、平田喜信「哀傷歌の構造」(『講座源氏物語の世界』第三集)などには、その指摘がある。

(13)『国語』18、昭40・11。(『源氏物語の構造』所収)

(14)実践女子大学本『紫式部集』(『私家集大成 中古I』所収)による。

(15)『朝顔と夕顔——宜孝関係の紫式部歌と源氏物語——』(『日本文学』昭48・10)

(16)注(13)論文

(17)『源氏物語の構成』(『文学』昭27・6。『源氏物語研究』所収)

(18)注(13)論文

(19)拙稿「六条院構想の成立に関する試論」(『今井源衛教授文学退官記念文学論叢』昭57)